九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「我が身にたどる姫君」本文の再建

今井，源衛

https://doi.org/10.15017/2332674

出版情報：文學研究. 79, pp.1-14, 1982-03-30. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

「我が身にたどる姫君」本文の再建

今井源衛

「我が身にたどる姫君」八巻の本文は、周知の如く、尊経閣文庫文、金子武雄氏本、書陵部本の三本のみあって、いずれも近世初期の写である。この物語の難解は有名といってよいだろうが、それがはたして、本文の伝来過程に於ける崩壊に由来するものか、それとも、原作自身の構文、表現の難解に由るものかは、まずいちおう考えてみるべき事であろう。

ところが、この物語の本文（テキスト）については、右の三本の中、書陵部本のみは影印本が刊行されているが、他は、金子氏による古典文庫本二冊『物語文学の研究』本、および笠間書院刊の平林文雄氏編『我が身にたどる姫君』対校本上巻があるのみであり、金子本を底本とする徳満澄雄氏の『我が身にたどる姫君物語注解』本は、テキストとしては異質であって、この種の資料としては用い得ない。

以下の調査に当っては、書陵部本は汲古閣刊の影印本を用い、他の二本は写真を用いた。三本の本文異同は比較的僅少ではあるが、なお若干の違いは認められるのであって、本調査の底本には金子本と同系の尊経閣本を用い、他の二本を校合資料に用いた。

掲出する要領は、金子氏の『物語文学の研究』の巻・頁・行によってその位置を示し、本文は尊経閣本に拠っている。

調査の対象は、本文中の脱落あるいは誤写と思われるすべての個所である。ただし底本文は尊経閣本なので、金子本の独自異文や缺文など、たとえば、巻六372Pの「心えさせたまへらん」の下の、「とてみそかに参りつるなり。かの大納言の君は、これにさふらひ給ふ」の三十字は、金本には落ちているが、尊・書両本にはあるので、ここには脱文個所として挙げていないのである。

また、金子氏の『物語文学の研究』には、本文右側に「脱カ」・「ママ」・「――カ」などと記した旁注がかなり多くあり、示唆を蒙る事多大であったが、ただ、それらの個所の中、そのままで問題なく意の通るものもかなりある反面、それらの注記のない個所に、問題を含むものも少なくなかった。私の以下の指摘自身にももとより、今後そうした事は多いはずであって、これ以外にも、「か」が「ハ」の誤写ではないかなどと疑われるものも若干残っている。又、それ以外にも、今後、今まで気付かれなかったものが新しく指摘される事も多いであろう。

作業としては、誤脱の個所を指摘し、誤写過程を想定して、原型に復すという事であるが、すべてに就いて、十分に説得力を有しうるか否かは、大方の判断に委ねる以外にない。

掲出本文の中、傍線部分の問題個所のみ限定して、原本の表記のままとし、他は適宜、漢字を宛てて、読解に便ならしめた。

(1) ㊀ 218―16

足立たぬ蛭の子とはしつみなるべき

三本異同ナシ。巻頭に近く、音羽の山里に住む我身姫が、両親に捨てられた形で、孤児の身の上を嘆くところである。

「足立たぬ蛭の子」は、書紀に見えるイザナギ、イザナミ二神の国生み神話を種とした、源氏物語明石巻の、「わたつみに沈みうらぶれ蛭の子の足立たざりし年はへにける」に拠った語であり、問題の「しつみ」はもちろん「沈み」であろう。しかし、「沈む」を体言化して断定の「なり」で受けるような語法があるとはどうも考えにくい。おそらく「な」は「た（堂の草体）」の誤写で、「しづみたるべき」（沈淪していてよかろうか）が原型であろう。

(2) ㊀ 229—17

誰にもあらはれ、我と知らば、ことのほかにはもてなさじ

二宮が音羽を訪ねて、姫君に会わせよと、尼上に注文をつけるところである。その心中を記したもの。三本とも異同はない。このままでは文意通らず、「らは」を衍と見て、「誰にもあれ」とするか、「誰にもあらばあれ」の「あ」が落ちたと見るか、どちらかであろう。後者の可能性が大と見られる。「その姫君がたとえ誰であっても、相手が私だと知ったら、冷い扱いはするまい」で、意はよく通る。

(3) ㊁ 256—6

目もかへすそまもらるるや

三本共異同ナシ。侍女の中納言君の目に映った女三宮の姿である。「目をかへず」は、よそ見をする、まばたきをす

るの意と思われるが、そういう言いかたはないのではなかろうか。「目もかれず」とあるべきところで、れ→れ→ゝ（江）→へ、の転写過程が考えられはしないか。

(4) ㊂262—3

いとおほえなき夕闇の空に、紛らはし入れてけり

諸本同文。「おほえなき」は、「おほつかなき」の誤写であろう。「束（つか）」が「衞」の草体の「ゑ」に誤られ、それが仮名書きの「え」となったものであろう。「おぼつかなき夕闇」で、もちろん意明らか。

(5) ㊂265—12

消えにけん雲のゆくへは知らぬどもあはれうち添ふ夕まぐれかな

うち独りごちて、つくづくとながめたまふままに、涙の浮き出づるを、まぎらはしたまへるも、いみじう心深げなり。□はかなげにのたまひ消ちたる御気配などのあやしきまで通ひたまへるが、闇のうつつは夢にまさらぬからに、これしもさだかなる面影にぞまもられたまふ。

三位中将（権中納言）が、異母妹の我身姫を訪れ、音羽の女性を思い出して感慨にひたる条である。空欄は、書本八字分、尊本二字分。空欄の下文は、我身姫のことであり、もとここには、姫の返歌一首があったものと思われるのである。

(6) ㊃ 296—9

九月つごもり、女院に行幸ありて、中宮・春宮も渡りおはしますさま、*1 さばかり広き池の心珍らしう御覧じ渡さるるをも、*2 春宮は、まづもろともにとぞ、御心に離れぬ。

内裏焼失の後、我身帝が水尾女院邸に移られたのと一緒に、東宮（三条院）も、女院邸に入るが、別れてきた三条姫のことが、気がかりであった、という一節である。金子氏は＊1、＊2の両個所に、〔脱落アルカ〕と注する。たしかに、前者＊1の個所は、以下に行幸の粧いについて何らかの記述があるべきところで、それがなく、直ちに春宮の心中に叙述が移るのは、納得しにくい。おそらく「たいそう立派だった」ぐらいの意の短文があったのではないか。

後者の＊2の個所には必ずしも缺脱を考える必要はなさそうである。「あれほど広い池の面が一望の下に見事に見渡されるので、それにつけても、春宮はまづ三条姫と一緒にと、お心から離れる事はなかった」で、十分ではないだろうか。

(7) ㊃ 296—11

入道の宮ぞ、まづうち聞きつけ給ふに、我が御時思し出でられて、□□〔うへ〕はいとど朽ちぬべき

東宮が三条姫を置き去りにして、水尾女院の邸に入ってしまった事を知った姫の母入道の宮が、自分の昔の悲しい体験を思い出して、泣き悲しむという所である。

□□の問題個所、諸本同文ながら、**尊**は「られて」が行末、「うへ」は次行の行頭となり、**金**は三字分空白を置い

て、同一行内で「うへは」に続く。**書**は二字分の空白を置き、「うへは」以下を改行する。金子氏は、「そでのカ」と旁注する。「うへ」が「そて」の誤写である可能性は、字体自身からいえば皆無とはいえないが、「うへ」の上に諸本に空白があり、あるいは改行するなど、脱字のある事を想定すべきでもあり、また「袖の上」は平安末以降歌語として多用される語でもある。金子氏の推定に従うべきであろう。

(8) ㊃ 302—10

右大将は□□まめだちたまふ。中納言は世のおぼえを始め、なほかやうの筋まで、心深く重き方に思はれたまへるを、心やましう思ふ。

右大将（殿の中将）が権中納言（宮の中将）を訪れて話を交す条である。

三本同文、且つ空白二字分の個所に**尊・金**は「本」と細注する。たとえば「ふと」などごく短い言葉であろう。

(9) ㊃ 303—14

なほ女のまじらひこそ、ひとしほ憂きものはありけれ。＊さるは、へだてなき中宮里におはします程は、女院もひとつに渡りおはしまして。

前項に続く、権中納言（宮の中将）が、妹の麗景殿女御の不遇に関連して、父の式部卿の宮に話す条である。

三本同文。すべて、空白個所ナシ。「ありけれ」までは、それ以前の文に続いて、宮の中将の言葉であり、「さるは」以下いきなり、地の文となり、懐妊した藤壺中宮の里居の有様に移るのである。このままでは、「さるは」の前

と、うまく続かない。金子氏が〔以下脱文カ〕と注される通りであろう。おそらくは、「など語りたまひぬ」の類の文があったものか。

(10) ㊃ 304—8

先駆追ひて花やかに分け参る。誰ばかりならんとつれづれなるままに、それそれたれがしならんなど、をのをのいひしろふに。

三条帝の勅使が、嵯峨の承香殿皇后のもとに遣わされる条。一行を迎える嵯峨院の女房等の姿である。

三本同文。「それそれ」はおそらく「それかし」の誤写で、「かし」の連綿を「〳〵」に誤ったものであろう。狭衣物語一（古典大系本100P）に「なにがし、それがし留めて侍れば、たづね給はば、聞こえさせてん」とあり、また源氏物語夕顔には、その古い形で、「なにがし・くれがしと数へしは、頭中将の随身、その小舎人童をなん、しるしに言ひはべりし」とある。此の条は、あきらかに夕顔巻を模したものと思われる。

(11) ㊅ 351—9

おどろおどろしう笑ひて、なけされいり給ひぬ

前斎宮の女房小宰相を兄の兵衛佐が訪れてくると、色情症の前斎宮が、はしゃぎまわる姿である。

三本異同ナシ。「いり」は「入り」であろう。「なけされ」は「にけさり（逃け去り）」の誤写ではなかろうか。「よ→る」は十分に考えられるし、「り→れ」はごく一般的である。

(12) ㊥ 354—7

内には、かひかひしく幼くおはしましし時（中略）うつくしみたてまつり給ひしかば、

大納言尼上が女帝を訪ねると、女帝は、自分が幼かった時、この人になついていたものだったと、昔を思い出すところ。

「かひかひしく」は、諸本「かひ〳〵しく」で異同はない。おそらく、「うひうひしく（初々しく）」の誤写であろう。「う→か」の誤写はごくありふれたことである。東も西も分らないような幼い頃に、の意で、文章もよく通る。

(13) ㊥ 358—10

古りたる尼をぞ、こところなき若人どもを御使にて、出で代る僧の装束、もの好ましうせさせたまふ。

前斎宮が、ほしいままに老人の少将尼につぎつぎと風流な仕立物の注文をしては、僧侶に与えて喜んでいるというのである。

「こところ」、諸本異同なし。「こゝろ」の連綿で「こところ」と誤ったものと思われる。「心なき」と改訂。

(14) ㊥ 358—13

昔、わざとならねどかけしろに御乳を参らせしが、いとらうたくおはしましし、

右の少将尼は、斎宮が乳呑子だった時に授乳した経験もあって、その可愛かった思い出のために、今以てむげに割り

切った態度は採れない、というところである。

諸本異同ナシ。金子氏は「かけしろ」は、動詞「かけしろふ」（関係づける、関わりをもつ」の名詞化したものとされる。しかし他に用例はない上に、接尾語の「しろふ」が、「しろ」という形で体言化することは、考えにくいのではないだろうか。これはおそらく、「かたしろ（形代）」の誤写かと思われる。「け（介の草体）」が「た（多の草体）」と相互に誤られることはよくある事である。「形代」は代理の意があり、上文の「わざとならねど」と矛盾がない。正式に乳母と決っていたわけではないが、何かの折には、乳母の代りに授乳していたというのであろう。

(15) ㊇ 370—15

本か手にもちて、式部大夫の朝臣に形の如く受けたる。

三条院が、若年に学問を習った時のことを語る言葉である。

「本か」、諸本異同ナシ。「か」は「ハ」の誤写であろう。「本は」と改訂する。

(16) ㊇ 375—13

心づきなきくね事ひ、錠をほどこせど、

性悪女の女房、中将が夫を嫌って、寝室に入れないようにしたというところである。

諸本異同ナシ。「くね事ひ」は、「くね事いひ」であろう。「い」の脱と見て、改訂する。『注解』は、「非常を施せど」と読むが、363—5にも「掛けたる錠にて」の語があり、ここも、男が寝室に入らぬように、錠を掛けるのであろう。

(17) ㊥ 376—2

尾張の勅旨の糸など、おほからかに見ならひたまへればなど、つかみつかはせば、

御所に出仕するようになった小宰相に、前斎宮がいろいろの用事を注文するが、これは、自分の所領の荘園から上った絹糸で織物を織るように依頼するところ。「おほからかに見ならひたまへれば」は斎宮の言葉である。「おほからかに」諸本異同ナシ。「おほかたに」の誤写か。「た」（多の草体）を「らか」と二字に誤ったものらしい。意味も「大体のところでお願いします。いつも（織物は）見なれていらっしゃるのだから」となり、通ずる。

(18) ㊥ 377—2

おはしますふる所の北に

諸本同文。「ふる所」は、金子氏が「ごカ」とされる如く、「御」の意の「ゟ（古の草体）所」が、訓読みにされて誤ったものであろう。「御所」と改訂する。

(19) ㊥ 378—5

中将の君は、俄かに悩みければ、こし車もとめて、ひすましかいゑへ出でいきにけり。

「こし車」、三本異同ナシ。「かいゑへ」は、尊本「かいゑへ」、金本「かいつゝ」、書本「いへゝ」。

「こし車」（輿）ならば「かいつつ」を取るべきであろうが、中将の君という性悪女が、最後には台所の隅で、も

ののけじみて、人に恐れられ叩かれたり、惨めな有様になった末に、急病で邸を出るにはふさわしくない。それを樋洗女がかつぐというのも変である。また「こし」を「うし」の誤写ととれば、「牛車」の例は、㊤328／12に「牛車ゆるされたまふ宣旨あり」とあり、用語としては成り立つ。しかし、これもわざわざ「求めて」といふのには、ぴったり来ないし、その場合には「かいつゝ」ではなく、「かいへ（ゑ）へ」（**尊・書**）で、樋洗の家へ退出したという事になるが、牛車で退出するのならば、何という事もない。これは、おそらく、「え→し」の転で、「こえ車」の誤写ではなかろうか、「肥え車」は、「痩せ牛に肥え車をぞかけてける」（水蛙眼目）の例もあって、南北朝には既に見える語である。中将の君がそれに乗って樋洗の家に入るのも、またわざわざ「求めて」というのにも、さらに、その家で、眼をくりむいて、「あつち死に」をしたというのも、この悪女にふさわしい最後である。「肥え車もとめて、樋洗が家へ」と改訂する。

(20) ㈧ 408—11

嵯峨の院の、世の中の移り変るをも知らせたまはず、静かなる御室（むろ）にて、＊昔の御心掟て違はず、わきて仕うまつる心ざしを尽くしきこえんと、

三本異同ナシ。＊の前文は嵯峨院の動静であり、＊以下は今上帝の心事である。＊の個所には当然何らかの文字があるべきで、たとえば「過したまふに」などが脱落したのではあるまいか。

(21) ㈧ 413—10

げに明け暮れととをり給ひし世も思ひ出でられて、

左大臣がわが子の忍草の姫君を見つけ出す条で、昔なじみの女房少将と話を交す条。少将は、昔、左大臣が里退り中の麗景殿女御に忍び通ったことを思い出している。

諸本同文。「とをり」は「とほり」であり、もと「通給し」とでもあったものを、「かよひ」と読まず、「とほり」と読み、仮名書きに改めたのではなかろうか。「通(かよ)ひ給ひしに」と改訂する。

(22) ㊧ 417 —10

御封をはじめ、みさほなにやかやと、数さへ多かるままに

金・書—みさを・**尊**—みさほ。

意味からみれば、当然「御荘」で、「みさう」が正しい。しかし長音の表記に「さを」「さほ」の形が現われることはまず無い事で、特に「御荘」ならば、「御さう」「御しやう」が普通である。おそらくは「御さう」の「う」を「乎」の草体の「を」に読み誤ったものではあるまいか。**尊**本の「ほ」は、この「を」をさらに「ほ」に変えたものだろう。「御荘」でよいであろう。

(23) ㊧ 417—16

ただみほくのいたり深き事をのみ心にしめて

諸本同文。『注解』は「みろく（弥勒）」の誤写とする。

これは、左の転化過程によって「道々（みち〳〵）」の誤りであること明らかと思われる。

ち（知）→お→か（本）→ほ

く→く

以上を、巻別に、脱字、誤写に分けてその度数を図示すれば上の通りである。目立つ事の幾つかは、巻四に脱字が集中し、巻六に誤写が集中していることであろう。それについで、巻八も紙幅は他巻の半ばであることを考えると、誤写頻度は巻六に次いで多いといえる。

巻序	一	二	三	四	五	六	七	八
脱字			1	4				
誤写	2	1	1	1		9		4

しかし、全体としてみれば、たとえば脱字も、巻三に和歌一首が想定され、巻四にあるいは数字に及ぶかと想像されるもののほかは一・二字のものが二個所に認められるに過ぎないし、誤字のほうも、ほとんどすべて一～二字以内である。もっとも誤写の推定作業自体がそうした少数字以内のものに限るわけではあるが、それにしても、そのほかに、特に重大な本文上の欠陥と認められるものはないように思われる。八巻に及ぶ大作のわりには、本文の損傷度は浅いというべきであろう。

この作品の難解は、それ故に、本文の損傷に基くものではなくして、もっぱら、原作自身の文体の難解に基くものと考えられ、今後はその面に、問題を移すべきであろう。

ただ、しかし、問題はさらに残っている。それは、語彙である。たとえば、金子氏によって、巻六に、中世語らしい語彙がほとんど集中的に用いられている事が指摘されていて、それが同巻の成立時点の問題に微妙な影を落しているようである。しかし、同氏の指摘されるその中世語の中には、右に誤写として指摘した「かけしろ」の如きも入っている。氏が列挙された中世的語彙については、私自身も、同感のものが大半ではあるが、しかし、こうした第六巻

の特異性の背後に、右のような比較的に誤写が多いという性格の影響を考えておく必要があるように思う。他に用例を見出し難い語彙については、この点特に慎重を期すべきかと思うのである。

しかし、今は、それ以上立ち入るべきではあるまい。右の報告を以て、この作品の本文再建についてはいちおうのしめくくりをつけたい。

なお、蛇足ながら、私は、この物語に就いて、昭和五十一年ごろから十人ほどのメンバーで「春秋会」なる名称の輪読会を持ち、最近ようやく、全巻を読了、その通釈、語釈原稿も大体まとめる事ができた。本論文は、その共同作業の上に成ったものであり、輪読会全員の作業としての性質を持つものである事をお断りしておきたい。